

公民館より

横井さんの

帰国に思い

館長

四方寿朗

「明日という日もなま命いだきつ
つ、文よむ心つくることなし」。私の
身命は昭和二十一年五月二十三日な
り。もう書くことはない。いよ
いよ死におもむくかなさまお元
気で、さよなら、さよなら

処刑半時間前捕縛す

木村久夫

これは戦没学生の手記「ぎげわだ
つみのこえ」の中で、この前の大戦
に学徒兵陣亡、戦後戦争犯罪者と
してシムガホールで処刑され、若者
の遺体の最後の一言である。

昭和二十六年夏の一夜、私は宮津
大平川河畔の二階でこれを読

らびいた。戦後の六年間を何え
なく生きて来た私の心をこの本
は強く打った。とりわけこの最
後の一文は、私の腹わたをする
どくえびつた。

戦争が終って、やつと自分の
目ざす学業の道に帰れると喜ん
だこの青年は、戦犯に問われ
かつての上級将校から、法廷で
真実の陳述を禁じられ、そのた
め将校は死さまのがれ、筆者は
死刑を宣告された。彼は全く納
得できな理由で、罪のない自
分が死んで行かねばならぬ苦悩
と、何としても断ち難い学問へ
の情熱を、死の前日まで読み返
した書物の余白に書き残したの
である。

「日本の士族の発展が、自らの死
後から始まるのは悲しいが、
私にわかるもつと立派な人が、
それを成し遂げてくれるだろう
若き学徒の活躍を祈る」とある
ではないか。
私はその夜、殆んど眠むれな
かった。青春を奪われ未来をむ
ぎとられて死んで行った多くの

若者の魂の叫びが、私の心を少
すぶり続けた。生き残った我が
身の幸せよりも何かがうしろめた
いような自分を、どうすることも
もてきなかつた。戦争の悲しい
思い本の「」である。

この数日、横井庄一氏のグレイ
島からの帰国がニースのトップブ
を飾っている。昭和元祿になれ
て、ともすると忘れ勝ちな戦争
の悲惨なことを、あらためて思
いしらされた。と同時に私は生
きることの尊さを身にしみ感じ
いた二十年前を思い出し、ど
なことがあっても戦争だけは許
してはならないと心に誓った。
横井さん、本堂に「さあ、さあ」
でした。

ろばた懇談会について

本年度は、脇とこを本
各三回つづつ開き、主とし
て環境衛生、民防、道路
などについて話しあいました。

由良の戸の

碑子について

今城力雄

前号に述べました宮根好忠の
由良の戸を渡る舟人権をたえ
、行方も知らぬ恋の道なきな
を引渡された加茂季府馬の碑子、
脇地区の稲荷神社境内にあります
ことはみなさまで承知のとおりで
あります。

加茂季府馬は京都加茂神社の祠官
(今の宮司)で当時有名な歌人
であります。

この「歌人が天保六年(今から約百
四十年前)由良に來りたてたの碑
文がものさかぬのであります。

ひと歳若狭の小浜に遊びしかへ
るさか、天橋立を見んとて丹波
の由良の戸を渡りしに景色色いと
上アリしかば好忠の歌を思ひ出で
由良の戸に權をたへしは井田にて

と口すさびしとこのあたりしろし
めす

君前めめして碑に残さまほしと
と給ふは紀國にも同名所あれば
まどなる人のために彼好忠は
此国の縁に成りて宮根後と世人
によばれしこと古書目に見ゆれ
ば成べしとばかり侍りて向地に
老筆をとり侍り也 穴忍々々
天保六年五月十三日
八十三又正四位下
加茂主系季府馬

と刻まれてあります。

尚書表面には田五篇の傳言

野由連の漢詩と共に

由良の戸はけふこまはてつ

あすしらぬ

身はうき船の浪枕して

社田東原

がなしやな由良の津波の

よるべ定めぬ人のこころは

祇園権女

とあります (四七、二二)

スポーツサークル

剣道部について

小林上敏夫

「エイ、マー」元気な元氣が
が体育館いっぱいにはこぼれ
いる。今日は寒松七の組の目
で、体育館には二重剣士の
者又は宮津剣道連盟の
寶も見えている。

寒い雪まじりの日、入念に
の日にも負けず大奮闘入
一月二十一日から十日間毎晩
時三十分——七時三十分の一
向稽古した総仕上げの三十三名

の二重剣士である。

昨年五月由良小学校の体育館
が新館になり、一時休んでい
た剣道を再開したところ二年
生から六年生までの三十三名の
可愛い二重剣士が集まり二重
の稽古に汗を流し心身の鍛錬
ましている。

「礼に始まつて礼に終わる」とい
う言葉にしたがって行動し、

(四) 子供を将来しあわせにするのも不
しあわせにするのも母親自身であ
るといふ自覚をしつかり持たず
ければならない。誰かがしてくれ
るだろうとわ、なるようにしかな
らなはいと考ふる他方本願や諦は
捨てて考え直していればよい。

個人の内面はみんなり端として考
究のしあわせは個人が考ふるに
誰か小さい力を集めて大きい力
に結束し子供たちの心身を心し
むものを取戻し行かぬはならな
い。大勢で誰か合つていかに自分
の負担がなかりに大切なるを教
えられ大変参考に存ります。一
地域の小さな集まりが合流して
市町村となり、それが府となり
となり申すに集つて全地域連合婦
人会となりて大きな力を発揮し
ています。『経世企画』長官一
は主婦連として新聞の刊行に
で詠れる五通大なる刀となつて
ることを両認識していたにき
いと思ひます。個人の内面を社会
と結びつけて考え正しく学ぶ正し
く判断できるように教育されねば
ならぬ。そのための社会教育の体

であり、地域婦人会であるとの
結論が示されました。

吉川由良

に ついて

山手田孝子

私は山が大好きだ。山には時代
を越えた夢と空想の世界がある。
私は少年の頃由良の車腹の上
に浦上から脇の探石場まで横
断した二ヒがある。道らしい道
も無く大変困難なものでした。
とても楽しい空想の旅であった。
何百年も何千年も前の由良は
一体どんな人だったろうか。
海岸線は山すそを這い天王山の
あたりは深い海であったろうし
現在の美しい砂浜は当然見
るとが来果たつたことだろう。
その頃の浦上は上り浦と下り浦
と天王山の下と家門のあたり
一戸戸或いは五戸と山が斜面に
へばりつくと下に散在して
そして現在の山の上のあたりは
比較的なだらかな斜面で下り

耕された小さな田や畑が隣家の
林に官林のすく下まで並んで
たことが土桶と云う下肥貯蔵用
の穴があることで証明される。
堂の上の先端は丁度岬の形に
つており滝の口と呼ばれるお堂
を中心にした左部があつたこ
とが、今尚在り土器の破片が
出土することによつてわかる。
しかし時代はいつ頃かわからな
い。
上り浦の氏神さん、滝の口のお
堂、妙見山、天多れ、脇山、
奥の温泉寺、脇のぼずれにある
お稲荷さん、これら結ぶ道は
今では断片的にしか残つてい
ない。
山すそに並ぶお地蔵さん、妙見
山から天王山、温泉寺を結ぶ細
い道は長々とある。このお地
蔵さんや賑わい路は何時、誰か作
つたものか、温泉寺跡にあり
の五輪の石塔だけが知られてい
ることかも知れない。
由良の渡は上り浦のあたりで、
川向うは地江が浦江かあり、
そこから無難な面へぬける山道

がある。そのふもとに後に身寄姫
身寄池と呼ばれるありにお寺
があり、由良を合めて檀家にもつ
大きなお寺になつたのは、温泉寺
が表れたためだろう。
その頃の交通路は大江山越えの陸
路と由良川を福知山より、高瀬舟
で下り、由良宮津間を百五船で
結ぶ水上路があつた。この二つは
京都と大の京都と云われる岩山
を中心にした奥丹と大動脈があ
つた。

やがて由良の海岸も荒れて行き、
脇の川尻から由良川の川口に向つ
て美しい細長い砂浜が丁度天の橋
立の形に出来始め、おだやをな
海が良港の称相を見せ出した頃か
ら、人家が下へ下へと出来始めに
なり、大江山越の陸路も次第にさ
びれ、航海の発展と共に千石船
による遠洋航海がなされる形にな
つた。この遠洋航海は明治の初期
にはすでに北は敦賀、新潟、酒田を
経て北海道の江差まで、南は堺港
、下関、釜山、香港までを
琉球へ、瀬戸内海は瀬の沖、高松
を経て兵庫港までの大航海と

して、奥丹の織物、新潟、酒田の
米、津波の梅産物等の大交易
がなされるまでになつてい
親流は明治初年の千石船最盛期
の船頭で元々津波に大権を
握り、細いことととて一つの誇り
と自慢を以ていた。この出陣の
て男は飲む程に酔つたおへそ
に「さかづき」をのせて孫達を
喜ばせ、せう良い男でもあつた。
明徳の中頃になつた式多日大段
の肉屋に金五郎の船高代を倒し、
お、おと破産する子はおわれに
も福知山の通いの意願舟の船頭
になつてしまつた。孫達を見
かねて明徳の末期出来たばかり
の梅津三郎へ入つたが、長男は
二三年後に外国へ行つてしまつ
たといふ、その末路は知らない。

この一庶民の盛衰のよつに高瀬
舟は遠洋の登壇、馬車や輪送
更に鉄道の出現により大正の中
期には自然消滅してしまつた。
しかし高瀬舟は砂利舟に又
り、更に機関舟となつて今尚
由良の港の面影を残して、庶
民の智恵心と努力によつて生き

続けている。
千石船に ついての資料は岩山
の金比羅宮にある稲荷さん
水ていすが、現在手もとに
いのでくわしくお紹介するこ
ができません。
二期待に 沿う津波、
も資料も持ち合わせず、
申し訳ないことと終つたこと
をおわいします。

花八千

花八千 日毎毎に 梅記水木
春木窓のさくら花の白散りつて
由良岳に雪のにお向の雪国

この里のみかん売の家の計立つ
春めく水橋の稚魚大はゆるる

こまな

時間旅行